

コラム

オンライン不登校支援プログラム room-K

—不登校児童生徒とその家庭をサポートするために—

さいとう ともみ
齊藤 友実

認定 NPO 法人カタリバ room-K 自治体連携担当

1 はじめに

「おはよう！ 今日もサークルタイムに来てくれてありがとう～」

支援担当のスタッフが子どものアバターに声をかける。NPO カタリバの取り組みであるオンライン不登校支援プログラム room-K(以下「room-K」という)が利用している2Dのメタバース空間「カタリバパーク」での朝の一幕である。その後も子どものアバターが続々と入室し、サークルタイム(いわゆる朝の会)を実施している部屋に集まってくる。

カタリバパークはまるで往年のドット絵RPGゲームのような見た目で、好きなキャラクター(アバター)を選び、自分の好きなあだ名を付けて活動ができる。カメラのオン・オフも自由で、チャットでのやり取りも可能だ。教室や自習室、スタッフが勤務するオフィス等が同じ空間に集約されており、日本全国から不登校の子どもが集う。

このように、room-K はメタバースなどのツ

ルを用いて不登校の家庭に伴走している。ここにその取り組みの一端を記したい。

2 不登校の現状と room-K の成り立ち

文部科学省「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(令和6年10月31日)によれば、令和5年度の不登校児童生徒数は昨年度から約5万人増え、35万人となった。現在の新宿区の人口が35万5,000人程度であるから、それに近い人数が年間30日以上学校を欠席していると考えればイメージしやすいかもしれない。

こうした事情を背景に、room-K の成り立ちは約5年前、コロナ禍の初期に遡る。「意欲と創造性をすべての10代へ」をミッションとする教育NPOであるカタリバは、2020年の一斉休校中、Zoomで子どもの居場所を立ち上げた。しかし、一斉休校が終わってからも、オンラインの居場所へのニーズは残っていた。子どもたちの中には、

学校には行けながオンラインであれば集団や学びの場に参加できる子がいるという可能性が見えてきたのである。その後、room-Kとして事業を立ち上げ、人の動きを可視化し、より一体感を感じることができるメタバースを導入。Zoomではマイク・カメラオフで様子が分からなかった子どもが、メタバースでは空間内を活発に駆け回る姿が印象的だった。



図 不登校児童を支援するメタバース空間「カタリバパーク」

3 子ども支援と保護者支援

room-K の支援は、大きく分けると個別伴走と集団伴走がある。まずは、個別伴走について説明する。

room-K では、1 家庭につき「メンター」と「支援計画コーディネーター(以下「CN」という)」というスタッフがつく。子どもに対しては、週1回実施の「作戦会議」というオンライン面談をメンターと子どもで実施する。様々な理由で心のエネルギーが下がり学校に行けない子どもに対し、数ヵ月～数年にわたってメンターがとことん向き合い、安心安全な関係性を築く。

保護者に対しては、CN が月1の面談を担当する。ときに雑談も交えつつ、保護者のニーズや悩みを聞き、子どもの特性や状況も考慮しながら家庭に対して個別の支援計画を立てる。加えて、保護者はLINE でいつでもCN に相談できる仕組みもある。

またCN は、子どもの所属学校とオンラインミーティングを実施したり、フリースクール等と情報交換するといった外部連携も担当している。オンライン・オフラインで役割分担しながら子ども真ん中の支援を進めていく。

集団伴走については、冒頭で記載したようにメタバースの特徴を活かし、集団活動の場を設けている。5教科を中心にしたワークショップ、イラスト作成やマイクラフトをみんなでやってみるクラブ活動など、平日の午前9時から午後2時半まで、曜日・時間ごとに様々なプログラムを用意している。こうした集団活動を通し、子どもたちは自分の興味関心を見つけたり、ソーシャルスキルを身につける機会を得ることができる。

4 自治体連携

room-K は、自治体(教育委員会)から業務委託を受け、公教育の一環としても利用者の受入れを行っている。room-K を利用する半数以上の子ど

もたちが登校日数0日であり、様々な課題を持つ家庭も多い。このような場合、教育委員会を経由して学校のみならず福祉などが有するリソースも併せ、家庭をまるごと支援することができる。また、教育委員会と正式な連携をすることで、room-K への出席を指導要録上の出席扱いに相当するものとして扱ってもらえる場合もある。オンラインでの頑張りが出席数に換算されることは、子どもはもちろん保護者にとっても大きな自信につながる。

5 オンライン不登校支援のこれから

オン/オフラインを行きつ戻りつしながら徐々に学校に行けるようになった事例、スタッフの話を聞いて一念発起し受験に臨んだ事例、room-K を通して家庭が福祉につながり、子どもの状態が安定した事例……。我々は、この取り組みからたくさんの好事例が生まれていることを、日々目の当たりにしている。子どもたちは、オンラインでまっすぐに向き合い、自分の言葉に耳を傾けてくれた人たちを内在化する。この先の長い人生の折々につけ、オンラインで出会った誰かの言葉を思い出しては、前に進む糧にしていこう。このような体験と機会は、オンラインでも十分に提供することができる。

また、room-K では全国から様々な経歴を持つスタッフが集まる。オンライン支援は、当事者のみならず、地理的・時間的制約のある大人に対しても、不登校という社会課題と接点を持つことができる手段になる。

とはいえ、room-K だけで全国の不登校の家庭に伴走することは難しい。今後、オンライン不登校支援が多くの当事者に届くには、まだまだたくさんの人々のご理解とご協力が必要である。room-K では、全国の不登校の家庭に必要な支援が届く社会を願い、日々支援に取り組んでいきたい。